

Nara Women's University

【内容の要旨及び審査の結果の要旨】 学校における
仲間集団の機能と構造：中・高生のエスノグラフィ
ー

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-07-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池田,曜子, 麻生,武, 浜田,寿美男, 森岡,正芳, 佐久間,春夫, 藤原,素子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/1752

氏名(本籍)	池田曜子	(大阪府)			
学位の種類	博士(学術)				
学位記番号	博課第338号				
学位授与年月日	平成19年3月23日				
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当				
	人間文化研究科				
論文題目	学校における仲間集団の機能と構造				
	—中・高生のエスノグラフィー—				
論文審査委員	(委員長) 教授	麻生 武	教授	浜田 寿美男	
		教授	森岡 正芳	教授	佐久間 春夫
		教授	藤原 素子		

論文内容の要旨

本論文は、子どもたちや教師などの当事者自身による現実の解釈や、現実の意味づけ過程に注目し、彼/女らによって経験されている仲間集団とはどのようなものであるかを解明することを目指した論文である。著者は、学校における仲間集団のあり方をとらえ直し、子どもたちが学校生活を送る中で仲間集団からどのようなものを得ているのかを描き出すことを目指し、学級集団内における仲間集団はどのように形成され、仲間集団同士の境界線はどのような形で引かれているのかについてエスのグラフィーの立場で研究を行っている。3年間に及ぶ中等教育学校におけるフィールド研究をまとめたのが本論文である。論文は、以下の5章からなっている。

第1章では、子どもたちの仲間集団に関する先行研究を検討し、その結果、まず子どもたちの形成する仲間集団に関して十分な実証研究の蓄積があるとはいえない現状が指摘されている。次に、このような先行研究の検討から、日本の仲間集団研究においては、当事者の視点から集団をとらえるという観点が欠如しており、仲間集団の存在が自明視されてきたことが指摘されている。

それに対して、本論では、「集団」とはなにかということに焦点を当て、「集団」を構成する当事者の経験や知覚に即して、当事者によって感知される「集団」という経験とはいかなるものなのかを明らかにすることを目指して研究を行うことが宣言されている。そして、ゴフマンの相互行為研究を参照して、「集団」のとらえ直しをおこなわれている。

第2章では、仲間集団のみならず集団を形作っている一人ひとりの人々が、状況をどのように意味

づけ、解釈し、行動に結びつけているのかという課題を達成するために用いる調査方法について整理されている。そこで、主張されているのは、さまざまな生徒の声を聞き、さまざまなメソッドを用いるトライアンギュレーションの方法の意義である。また、フィールドワークの限界や質的調査の倫理性についても言及されている。

第3章および第4章、第5章では、3年間に及ぶ中等教育学校で行ったフィールドワークの結果にもとづきつつ、仲間集団のあり方が考察されている。

第3章では、子どもの仲間集団の境界はどのようにして捉えることができるのか、そして、様々な分類軸を用いて分けられた仲間集団は、互いにどのような関係にあり、子どもたちによって学級内でどのように位置づけられているのかが分析されている。著者は中学2年生、中学3年生、高校1年生の各学年1学級において、子どもたちが学級内で形成している仲間集団は、授業中、特別活動、休み時間などの学校内での行動、学校外での趣味や余暇の使い方、学級内での友人意識のどの分類においても、一定のパターンを持っていることを明らかにしている。また、各学年を比較してみると、サブカルチャーの分類内容や友人意識において多少の変化があったもの全体としてはきわめて類似しており、学級集団内における行動と子どもたちの形成する仲間集団の位置関係は密接にリンクしていることが明らかにされている。また、学年の進級にともなう組替えによって集団が解体された時、子どもたちがどのような仲間集団を新たに形成していくのかについても考察されている。

第4章では、対象を中学2年生にしぼって、詳細に仲間集団の維持過程を描き出し、その構造明らかにすることが目指されている。結果、学級集団内に存在する複数の集団は、並列的ではなく、階層的に存在していることが明らかにされている。そして、学級集団内での発言の受け止められ方と、仲間集団同士の力関係は対応していることが指摘されている。子どもたちは、仲間集団から学級集団などに集団規模が変化した場合、仲間集団間における境界をさらに意識し、自己の新たな集団内での位置や役割を再度読み取り直していた。このような刻々となされるダイナミズムは、同じ内容の言葉でも、さらに学級集団内での所属する仲間集団の位置関係による意味が付加され、周囲の受け入れられ方が異なることや、集団規模が変化した時に関わりを持つとする優先順位にあらわれていることが指摘されている。また、そこから仲間集団の維持は、各構成員の絶え間ない努力によって保たれており、維持とは、関係の不安定さを補うためのダイナミックな作用として捉えなおすことができるのではないかと指摘されている。子どもたちが集団の境界を常に確認しながら集団を維持していくということは、学級集団内での仲間集団同士の関係における境界の確保につながっており、それは学級集団内での子どもの位置の確認に応じたものであるということである。さらに、子どもたちの振る舞いや発言が、仲間集団同士の関係によって規定されていることも確認されている。

第5章では、これまで確認してきた仲間集団の影響を少なくするためには、どのような試みが可能であるかについて授業中の事例に着目して分析されている。結果、子どもたちの発する授業の内容に

関係のない発言であっても、教師が柔軟に対応することによって、授業を妨げるものとはならず、子どもたちをより授業に積極的に参加させるきっかけとして活用できる可能性が指摘されている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、中等教育学校の生徒たちの仲間関係を2年生・3年生・4年生と3年間にわたってクラスに入り込み、さまざまな方法を用いて調査することでエスノグラフィー的に研究した成果をまとめたものである。3年間の参与観察時間は、中学2年生のクラスにのべ113時間、中学3年生のクラスにのべ117時間、高校1年のクラスにのべ121時間、総計351時間に及んでいる。授業中、休み時間、放課後の生徒たちの離散集合の様子や会話が記録され、それによって、従来にはない生徒たちの仲間集団のリアルな姿が描き出されている。発見された事実はきわめて興味深く、生徒指導やいじめの問題を考えていく上できわめて貴重な資料となる、厚い実証的研究として高く評価できる。本論は5つの章から構成されている。

第1章では、仲間集団の先行研究として、ソシオメトリック・テストによる調査と、質的調査を用いた学校でのエスノグラフィー研究、住田の仲間集団の研究などが取り上げられ、批判的に検討されている。いずれも当事者である子どもの視点から仲間集団がとらえられず、外部の視点から仲間集団が実体視されているが問題であると指摘され、当事者自身の視点から仲間集団をとらえることの意義が主張されている。従来、著者のような研究がなされていなかったのは、クラスに入り込んで3年間継続的に参与観察することが現実的になかなか難しいことによる。その意味で、この一連の参与観察をなしとげたという意味で、著者は有利な地点に立っている。そして、その有利な立場を、ゴフマンのフレイミング理論を適用することによって適切に位置づけている。仲間集団とは、その当事者たちの絶えざるフレイミング行為によって生成され続けているものなのである。それをとらえようとしたのが著者の参与観察研究である。

第2章では、調査対象者の日常生活に入り込み、日常的な出来事の理解や認識を分析対象とする「エスノグラフィー」を調査手法として用いる意義と限界、そして、本研究が実際に用いた複合的調査方法について議論されている。

第3章は、本論の中核となる章である。3年間の縦断的な参与観察によって、各学年の仲間集団が同定されている。子どもたちが学級内で形成している仲間集団が、授業中、特別活動、休み時間などの学校内での行動、学校外での趣味や余暇の使い方、学級内での友人意識のどの分類においても、一定のパターンを持っていることが厚いデータによって実証されている。子どもたちの仲間集団のリアリティが、かくも精緻に同定されたことは、本研究の成果である。集団の特性などがタイプとして、3学年に共通するものとして抽出されたこともきわめて興味深い。

第4章では、対象を中学2年生にしぼって、詳細に仲間集団の維持過程を描き出し、その構造が明

らかにされている。仲間集団内で子どもたちは、互いに役割を自ら選びとったり、仲間集団内に占める位置によって選ばとらされたりすることによって自らの役割をかなり明確に認識し、会話において話題を提供し、行動を率先して行うリーダーと、それ以外の子どもたちという関係を構成し、仲間集団を維持していることが解明されている（「子ども社会学研究」に掲載）。

第5章では、教室場面において以上で確認されてきた仲間集団の影響を少なくするためには、どのような試みが可能であるかについて授業中の事例に着目して分析が行われている。授業中の教師と子どもとの相互行為過程における違いは、教科内容によるものではなく、担当教員の対応の違いであり、子どもたちの行動に対する仲間集団の影響は教員の対応によって異なることが確認されている。まず、通常多くみられた授業では、自由に発言する子どもが限られていた。つぎに、順に指名を行う授業では、子どもたちの発言において仲間集団ごとによる違いはほとんどみられなかったが、行動をみると授業に対してさらに消極的な行動をとるという形で差がみられた。ところが、教師と子どもたちの会話がかみ合い、時には笑い声も上がるような授業では、子どもたちによる発言や行動の自由度が大きく、なおかつそれが活発に行われているにも関わらず、仲間集団の影響は小さくなるということが指摘されている。そこから、子どもたちの発する授業の内容に関係のない発言であっても、教師が柔軟に対応することが重要であり、それによって、これらの発言は授業を妨げるものとはならず、子どもたちをより授業に積極的に参加させるきっかけとして活用できる可能性があることが指摘されている。

本論文が明かにした学級内の仲間集団の生態メカニズム、また生徒たちが絶えざるフレミングによって集団を維持し続けているダイナミズムのプロセスは、きわめて学問的にも教育実践的な意味においても価値の高いものである。オリジナリティ、一般性においても高く評価できるものである。よって、本論文は奈良女子大学博士（学術）の学位を授与されるに十分な内容を備えているものと判断する。